

「豊島人」になる日を夢みて

豊島てしまに新規就農し、イチゴ栽培を始めて今年で九年目を迎える。産業廃棄物による風評被害を払拭すべく、島の資源を活かした産業を創出し、若者が住める島づくりを目指す。

就農の夢を 実現するため豊島へ

私の住む豊島は、ご存知のように産業廃棄物の不法投棄で世界的に有名になった島です。業者や行政との二五年にもおよぶ闘いのなかで、多くの人々の支援を得てきました。そして平成二年、住民側の願いどおり、廃棄物の完全撤去という勝利を勝ち取りました。しかしながら、この闘いで失ったものも多く、農業と水産業は風評被害により壊滅的な打撃を受けました。米・ミカン・柿・野菜・牛乳・ノリ・魚など、島のほとんどの産品は豊島産とし

ては販売できなくなり、小豆島産や香川産として販売せざるをえなくなりました。産業が崩壊した豊島に就労できる仕事は少なく、高校や大学を卒業した後に豊島に帰る若者はほとんどいなくなりました。最大で三五〇〇人を数えた島の人口も、たった三〇年で三分の一にまで激減してしまいました。

私が豊島に来たのは一〇年前、平成八年の秋でした。足掛け一〇年働いた大手飲食企業を退社し、単身で島に渡ってきました。少年期からの夢だった「農業」に従事するためでした。

振り返ってみますと、私の少年期は喘息との闘いの日々でした。小学六年

生のとき、埼玉の地から豊島に住む祖父母宅に転地療養のため、一年間お世話になりました。産業廃棄物の持ち込みが開始される一年前のことです。祖父母宅は農家で、そのとき農業を手伝った体験、そして豊島の自然のすばらしさも相まって、島での農業が将来の夢となりました。

大学は北海道の酪農学園大学に進学し、農業を学びました。卒業後すぐに就農せず、飲食企業に入社して一〇年間、営業・流通・消費者ニーズなどを学ぶ機会を得ました。いま思えば飲食業時代の一〇年は、いまの私にとっ

ています。就農をあきらめ、そのまま飲食業にとどまることも考えましたが、やりがいがあっても生きがいのない生活より、夢である農業に生きがいを見いだそうと決心しました。

農業に夢をかけて豊島に来たわけですが、農業に従事するためだけなら何もわざわざ離島に来ることはなく、もっと農産物の流通にとって便利な都市隣地で就農すればいいわけです。しかしながら私がこの豊島を選んだ動機は、裕福ではなくてもこの豊島の美しい自然のなかで土に親しむ家庭生活を営み、子育てをしたい、子どもとともに生きたいと思ったからです。

私はいま、三人の子どもに恵まれ、我が子どものころに都会では経験できなかった、大自然の営みのなかでごく自然な家庭生活を満喫しています。私は三人の子どもたちが将来、私のよ



多田さん御夫妻。できたイチゴに感動！ いまや豊島の特産物のひとつになっている。

うに豊島を愛して、豊島で生きることを選んでほしいと願っています。そのために、私たち豊島を愛する者がしなくてはいけないことは、豊島に経済基盤（産業）を創ること、医療環境、教育環境、交通などのインフラを整備することです。そして私たち大人がこの島で生き生きと心豊かに、そして幸せに楽しく生きているところを子どもたちに見せてやるのが大切だと思います。

イチゴの豊島ブランド化を目指して

す。私はいま、そんな気持ちでさまざまな取り組みを始めています。

豊島に来て半年間、ノリ業者のもとで働きました。島に来て、農業ではなくいきなり漁師仕事というのは方向違いとしかいえないかもしれません。しかし、瀬戸内海の島ならではの漁師仕事は、豊島の美しさと過酷さを知るには最高の経験でした。船から落ちて寒中水泳をしたり、島影から上がる美しい朝日を眺めたり、そのときの光景は強烈なインパクトとして私の心をつらえめました。

九年前、島の活性化の起爆剤になるようにと香川県の支援を受けて四軒の家族がイチゴの栽培をスタートさせました。かつて産業であった農業をもう一度再生

したい。住民が誇れる農産品をつくりたい。雇用を創出し、若者が働く場所をつくりたい。そんな思いでのスタートでした。しかし、島で農業をするということとはそんなに簡単ことではありませんでした。

私たちはイチゴ栽培がまったくの未経験でした。まず、毎週のように島外の先進イチゴ栽培農家へ視察に行き、それと並行してハウスの準備や苗の育成を行わなければなりません。

思いをし、はじめて一反のハウスの中で赤く色づいたイチゴを見たときの感動。それは涙が止まりませんでした。

二年後、雇用の創出を目的とし、一反六畝の増反を行いました、この時も苦労をさせられました。まず土地が借りられないのです。荒れ果てた田んぼや畑



「豊島・島づくり委員会」での植林活動。将来は家族3代で行うことを夢見て……。



「豊島・島づくり委員会」とユニクロのみなさんとの作業。今後いろいろな方と交流をしていきたい。

を借りるために地主へお願いにいくと、「この馬の骨かも分からぬ者に、先祖代々受け継いだ大事な土地を貸せるか！」と怒鳴られ、話も聞いてもらえませんでした。一年をかけての交渉の結果、やっと夢を理解してもらい、三人の方に土地を借してもらえることになりました。そして整地を始めて三ヶ月後、ハウスができ上がりました。いま、四人の働き手を雇用し、年間一〇

トン以上のイチゴを京阪神方面に出荷しています。また豊島全体では、六軒のイチゴ農家が就農して、年間四〇トンを出荷、七人の働き手を雇用しています。

消費者に喜ばれる美味しいイチゴをつくるために情報交換や勉強会を行ったり、作業が遅れている農家を手伝ったりして、いまでは住民が「孫のお土産に、お歳暮に、帰郷してきた子どものお土産に」と、豊島

ブランドのイチゴを自慢しながら持たせてくれるようになりました。

今後、全量「豊島ブランド」で独自出荷することを夢見て、これからの高品質なイチゴをつくっていかうと考えています。またイチゴは夏の収入がないため、イチゴハウスの空きスペースを使って一五種類のハーブ栽培も

始めました。島内の施設や民宿、岡山や香川のホテルに地物の新鮮ハーブを売り込もうと計画しています。現在二つのホテルからオファーをもらっています。うまく軌道に乗れば、夏場の雇用も生むことができると考えています。

若者有志で 島の教育支援を

平成一二年、公害調停の最終合意調印式が豊島小学校で行われ、その集会に参加したことを期に、島の活性化を担う組織「豊島活性化プラン推進協議会(のちの島づくり委員会)」に参加して活動を始めました。しかし、この組織は島の観光協会や自治会役員などのであて職で構成されたボランティア組織で活動していたため、ほとんど機能しておらず、何ごとも中途半端で結果が出ないことはかりでした。また、島の将来を見据えて活動をしていくはずのメンバーは、平均年齢六五歳を超えた方が多く、パワフルにことを進められませんでした。しかし、まだこの時に

は若者にこのお年寄りの方々を越えるパワーと団結力がなかったのです。

四年前、少子化から島の民間保育所と町立幼稚園の同時撤退問題が起きました。私は「幼保一元化を考える会」代表として、「豊島PTA連絡協議会」

(連P)とともに一年間にわたって町と協議を続けました、その結果、町が委託し民間が運営をする、幼稚園と保育所の機能を持った幼保一元の民間保育所として、小学校にあがるまでの児童福祉機関を島に残すことができました。この活動を機に、二〇〇三〇代の若者がまとまるきっかけができました。

島には、「教育後援会」という地域で学校教育を支えている組織があります。島の学校では島外で行う部活動や学校の交流などを行う際には、四国本土の学校では考えられない交通費などの経費がかかります。その経費は連Pと自治会の募金活動を通してまかっています。しかしそれだけでは到底足りません。町の教育委員会に陳情をしても、小規模の幼保・小・中学校ゆえ

についた予算も少額です。そのため教育活動にも支障がでています。たとえば危険遊具になった古い遊具を撤去した保育所にはブランコ以外にほかの遊具はなく、中学校も二年続きで襲来した台風によりテニスコートが流され、テニス部が活動できなくなっていました。

そこで、連Pで「PTA有志の会」を立ち上げ、資金づくりを始めました。日曜のたびに集まり、池や福祉施設、町道の草刈りなどをしました。また、自治会主催の夏祭り花火大会で飲食販売(出店)をし、年間五〇万円ほどを稼ぎ出し、保育所にジャングルジム、中学校にはテニスコートの補修費の一部を助成することができました。私を含め五人で始めた「有志の会」は、現在一八人にまで人数が増えて活動を続けています。

「島づくり委員会」で オーリーブ基金を有効活用

豊島産廃事件を機に、「瀬戸内オリ

「オーブ基金」が元弁護士の中坊公平先生と建築家の安藤忠雄さんによってつくられました。この基金は、豊島をはじめとする瀬戸内の島々の緑化を目的に植樹などを行う事業に助成をし、瀬戸内地域の活性化を目的にしています。募金活動は、ユニクロが店舗募金箱などで協力してくれています。

豊島でも平成一二年より、自治会(廃棄物対策豊島住民会議)が主となってオーブの植樹活動を行ってきましたが、なかなかうまくいかず、植えたオーブが枯れはじめました。そこで一七年の秋、私たちは四人のメンバーで「農事組合法人てしまむら」を立ち上げ、農業を主体とする仕事づくり、雇用づくりのための活動を開始しました。実際の事業としては、①島の特産物を生産する②島の農作物を代理宣伝販売する③グリーンツーリズムを通して島外との交流を図る④オーブ基金の助成を受けて経済植物としてのオーブ栽培をスタートさせる⑤枯れ始めたオーブを再生させる、などです。

しかし、島の代表の方々から、「わしは聞いていない、勝手に法人なんかつくることは許さん、ましてや島の財産であるオーブを勝手に私物化するなど絶対に許さん」と、お叱りを受けてしまい、「てしまむら」としてはオーブ基金関係に手が出せなくなってしまうました。しかし、いまの自治会の力では枯れはじめたオーブの再生



小学生を招待して「てしまむら」のタマネギの収穫。本当に楽しそうに収穫している。

や新規事業はできません。このままでは豊島のために募金してくださった方たちを裏切ることになってしまいます。この現状を何とかしなくてはいいな、いの思いから、島づくり委員会をあと職の組織から、目的を持ってやる気と行動力のある若者を集めて積極的に活動できる組織へと、改革することを考えました。協力してくれそうな島の若者に現状と夢を語り、賛同者一八人で新生「豊島・島づくり委員会」を自治会の承認を得てスタートすることができました。

「豊島・島づくり委員会」は、①医療(救急医療も含む)の充実②学校再編や教育環境の改善(P.T.A有志の会)③仕事づくり(子どもが島に残れる環境づくり)④交通インフラの維持整備を目的として活動するにしました。はじめての事業は、オーブ基金を利用して海岸線の防風林再生を行うことでした。「この木が大きくなったとき、今度はお前たちが子どもと木を植えるんだぞ」と二〇〇〇本の木を子ど

もたちとともに植えました。

次の事業としては、荒廃林（クヌギ）の間伐を行い、間伐材を使ってシイタケの栽培に取り組むことでした。一二月に木の伐採をし、一月には菌の植え付けをする予定です。

今後は、木の植樹やシイタケ栽培はもちろん、オリブの再生・新規植樹事業など島の自然を使いながら遊び心で楽しく、メンバを増やしながら活動をしたいこうと計画しており、目標の一つである専従（住）職員を一日も早く雇えるようにしたいと思っています。

てしま 豊島 data

瀬戸内海の東部、小豆島の西3.7kmに位置する。面積14.49km²、周囲18km、人口1,119人（平成18年12月現在）。昭和50年代後半から島に産業廃棄物が不法投棄され、業者や行政を相手にした長年の闘いの結果、平成12年、廃棄物の完全撤去という合意に至る。現在は直島の中間処理施設で廃棄物の処理が行われ、平成28年に完了する予定。特別養護老人ホームや精神薄弱者更生施設など福祉施設の充実を図る「福祉の島」としても知られている。



二〇年後は 立派な「豊島人」に

私が島に来て一〇年が経ちます。イチゴや「てしまむら」、「豊島・島づくり委員会」と、気づいたら同じ目的に向かって三つの活動をしていました。イチゴと「てしまむら」は合体して農産品の生産・加工・販売を行い、「豊島・島づくり委員会」とも連携を取りながら活動したいこうと考えています。島は情報が少ないし遅いとよくいわれますが、逆に都会に居ると情報が多

すぎ、必要のない情報に惑わされてしまいます。島では、必要なものを自分から求めれば得ることが出来ます。自分に信念を持つて行えば、迷うことなく突き進むことが可能なのだと思います。確かに島だからマイナスイメージもありますが、それに替わるプラスの面もたくさんあるような気がします。

私は、豊島だからできることをこれからも全力で取り組んでいきたいと思っています。二〇年後、子どもたちと一緒に楽しんで、「豊島人」になっていることを夢見て。

多田 初（ただ はじめ）

昭和39年東京に生まれる。10年間勤めた飲食企業を退職、平成8年に豊島に移住。ノリの養殖業者の手伝い、酪農研修を経て平成10年、産業づくりのためイチゴの栽培をスタート。同17年に仕事づくりと雇用づくりを目的に「農事組合法人てしまむら」を設立し代表理事に就任。翌18年、島の若者とともに島の活性化を行う「豊島・島づくり委員会」を結成、若者が住める島を目指して活動中。